紹介

矢田俊文著『日本中世戦国期の地域と民衆』

著者の問題意識は日本中世の戦国期の特質の解明にある。戦国期の政治権力については、郡規模の領域を支配する「戦国領主」が基軸であること、その上位に立つ政治権力は「戦国領主」を緩やかに支配し、近世の政治権力とは異なることを述べ、戦国期を中世最後の段階と評価した。また戦国期の社会については政治権力に対抗する村と村連合などの意義・可能性を重視すべきであり、近世に連なる仕組みが形成されつつあったと触れた（「戦国期権力論の一視点」『歴史科学』七九、一九七九）。右の視点から本書で著者は戦国期の社会の特質を論じる。村、村と村が結びついた地域、地域の住民が検討素材である。

本書の内容を以下に目次で示す。

序章　研究史
第一章　戦国期の村と地域
第一節　戦国期の村の成立
補論1　砂丘の村と平地の村
補論2　非人宿の解体
第二節　戦国期の地域の成立
第三節　戦国期の村と政治
第四節　戦国期の村と地域
補論3　惣墓の成立
第二章　戦国期の都市
第一節　守護・守護代と都市
第二・三節　明応地震と港湾都市
補論1　北東日本海経済圏の解体
第三章　統一権力期の村と地域
第一節　統一権力と村
第二節　国絵図と村
第三節　民衆の地域認識
補論1　宿場町と国絵図・幕領検地

中世後期・近世前期を通じた検討によって戦国期の社会を位置づけるという著者の意図通り、検討する時期が長い。以下に章ごとに紹介するが、補論は割愛させていただく。

第一章第一節では、戦国期の越後国岩船郡を素材に一六世紀に以前とは異なった場所に集落が成立して近世の集落へと連なる事例を示す。第二節では和泉国唐木村を中心に農民の法意識の変遷を論じる。中世前期では荘園領主と刀禰と百姓とで置文が結ばれた。しかし鎌倉末期に百姓が置文を守らなくなった。戦国期には村落構成員が独自の法を定めてその遵守を強く求めるようになった。最後に戦国末期の紀伊国雑賀惣国を素材に、村落を越えて近隣村落連合の「くみ」、「くみ」の集合体の「惣国」において様々な紛争が調停されるようになったと述べる。そして政治権力に対抗する「くみ」の存在を統一権力が許さなかったと結び、近世の村との断絶面も指摘する。第三節では和泉国日根野庄入山田村の軍隊駐留阻止が素材となる。入山田村が同庄内の守護方に属する日根野村とは行動を別にせざるをえなかったこと、和泉国守護細川氏・紀伊国根来寺とは政治・経済関係上対立できないため巧みに交渉して軍隊を退けたこと、かかる事情を正しく把握していない領家の九条政基の認識と入山田村住民の認識とは乖離していたことを述べる。第四節では「日根野庄日根野村」地域の村が素材である。用水・山野・祭祀のまとまりとして「日根野村」があり、訴訟・逃散・収納な

どを行うまとまりとして領主の支配に対応して地頭方の「西方」と領家九条家の「東方」という二つがあったと述べる。そして同地域には番頭を中心に「生活」と「政治」とが一致した最小単位のまとまりがあったこと、このまとまりが先に見た「生活」のまとまりと「政治」のまとまりとを矛盾させずに機能させており、近世前期の日根野村内の「村」に連なることを述べる。

第二章では都市が主題である。第一節では戦国期の越後の春日・善光寺・府内の三都市を上杉輝虎が支配したが、これらの都市を一つに統合するような計画がなかったこと、それは戦国期の越後国の政治状況に対応していること、近世の堀氏の支配期になると城と城下町と湊との機能が統合されたことを述べる。第二・三節では紀伊国和田浦・遠江国橋本・伊勢国安濃津を素材に一五世紀末の地震によってそれまで栄えた都市がなくなり、近世に連なる新たな都市ができたと述べる。

第三章第一節では、近世の紀伊国・和泉国の高野山領の村が素材である。統一権力が高野山に与えて役賦課の基準とする知行目録の村と、統一権力が検地・村切をし、高野山が年貢を収取する村とは異なること、前者の村は後者の村のいくつかを含むことを指摘し、近世の支配単位としての村には次元の異なるものが二つあるとする。第二節では摂津国の豊嶋郡原田郷内の相論を素材とする。国絵図・郷帳によって幕府が把握する村と、幕領検地によって年貢賦課の単位とされた村とが異なり、前者の村が後者の村のいくつかを含むとする。また国絵図を作成する際、前者の村は後者の村の運動によってその範囲が変わることもあるという。第三節では近世越後国の本願寺教団の裏書を素材とする。幕府・藩関係の史料での地域表現は支配単位である国・郡・村を原則とする。しかし本願寺教団の裏書では地域の実態に即して「村」だけではなく「町」という表現も見られるという。裏書を民衆の地域認識を反映したものとする。

以下、第一章二・三・四節について感想を述べたい。これらの論考は一九八五年から八八年にかけて発表されたものである。この時期の戦国期村落研究は、村落内部の階層を重視する傾向から村落が一つのまとまりとしてもつ意義を追求する傾向へと変わりつつあった。同様の視角をもつ研究に勝俣鎮夫氏の研究があるが、本書所収の論文もそれとならぶ先駆的研究として位置づけられるべきではなかろうか。地域の政治経済関係によって村落同士が協調行動を取るだけでなく、多様な行動を取ったとする第三節の論点は現在でも重要であり、あらためて村連合の内実を検討する必要がある。

しかし本書には戦国期社会の形成過程の考察が不足しているという問題もある。例えば著者のいう村が前段階とどのように違うのか、それはどのような仕組みでおこったのか、著書の論じる村は戦国期以前にもあるのではないか、などの疑問を抱いた。いずれにせよ本書の論点は今後とも検討されるべきものである。

（A5版　三三七頁　索引七頁　二〇〇二年四月
清文堂出版　本体八八〇〇円）

（平出真宣　京都大学大学院文学研究科博士後期課程）